

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：28001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16749

研究課題名(和文) 本土大衆文化の影響にみる近現代沖縄の盆踊りに関する基礎的研究

研究課題名(英文) The basic research on modern Okinawan bon-odori under the influence of Mainland Japanese Popular Culture

研究代表者

遠藤 美奈 (ENDO, MINA)

沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員

研究者番号：80772780

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、本土大衆文化が沖縄の戦前から本土復帰にかけて地域文化へ与えた影響とその役割について、芸能研究の側面から明らかにすることを目指した。ここでは、沖縄のエイサーやアンガマといった盆行事に対し、競合する芸能として本土式の櫓を用いた盆踊りを他文化に見立て、新聞・公文書等で用いられる用語や実践の様子を整理して考察を行った。

戦前の記録のうち盆踊りの実践が認められたのは八重山地域だけで、戦前の移入が戦後の定着に結びついていないことが明らかになった。また、戦後の沖縄本島での移入・定着には寺院が関与したほか、琉米文化会館や将校クラブなどの日本文化を推奨しない米機関が強く関与していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世の沖縄芸能研究は、かつての琉球が取り入れてきた日本や中国など周辺諸国の音楽文化に目を配ってきたが、それに対して従来の近現代の沖縄芸能研究では、そこを見てとる努力を十分にしていなかった。つまり、後者の研究は郷土芸能の特異性を注視しすぎたために、沖縄に由来しない特徴を他文化とみなし、多様な文化との接合という最も沖縄らしい特色を排して描いてきた。本研究は、近現代の沖縄が時世に左右されつつも多様な文化を取り入れてきた過程を改めて見直すことで、複雑なアイデンティティを形成する沖縄とその芸能史に新しい視点を提供できたものと考えている。

研究成果の概要(英文)：This project researched the influence and effects of mainland Japanese popular culture on Okinawan regional culture from the pre-WWII years up to 1972, focusing on a study of performing arts. Using a textual analysis of first-hand accounts and terminology found in newspapers and other public documents, the study considered the position of Japanese bon-odori using a yagura raised stage as an 'outside' culture in opposition to Okinawan eisa and angama bon traditions. The study showed that the pre-WWII performance of Japanese bon-odori was limited to Yaeyama, and this pre-WWII introduction did not lead to continued performance after WWII. In addition, the post-WWII position of Japanese bon-odori in the Okinawan mainland was seen to be influenced by Buddhist temples, while American military organizations such as the Ryukyu-America Cultural Center and Officers' Club were actively opposed to the promotion of Japanese culture in Okinawa.

研究分野：民族音楽学

キーワード：盆踊り エイサー 大衆芸能 アイデンティティ 旧盆 櫓 沖縄 琉球

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

エイサーは、沖縄の民俗芸能の一つで、便宜的に沖縄の盆踊りと説明される。古くは1920年代に柳田國男や折口信夫ら本土における盆踊り研究の潮流のなかで、エイサーを「琉球の盆踊り」(『民俗芸術』1928)として山内盛彬が学界で紹介したのが早い。

ところが、沖縄で伝承されてきた盆踊りは、エイサーだけではなかった。それは本土式の盆踊りである。現在もそれを見ることはでき、エイサーが終わった広場で本土式の盆踊りを親しむ婦人や自治会員の姿を目撃してきた。それにもかかわらず、これまで研究で扱うことをしてこなかった。その背景には、特有の文化に着眼するあまり本土の大衆文化の存在を排し、多様な文化の接合といった芸能の有り様に目をむけてこなかったことにある。したがって、本土式の盆踊りは、エイサー研究の範囲に納められることがなく、かつ報告もないため、本土の大衆的な盆踊り研究のなかでも扱われてこなかった。

本土式の盆踊りは、全国的な分布がみられる大衆的な芸能で、特別な事例には見えにくい。しかし、戦後の沖縄が置かれた社会的な状況を考えた場合には、大きな違いが見えてくる。

アメリカ統治下の沖縄では、日本本土との精神的な切り離しを目的として、琉球文化が積極的に再興された。そのなかにもありながら、沖縄の人々は盛んに本土式の盆踊りを興じてきた。この実践には、本土復帰を背景とした本土の盆踊りとは異なる社会的・政治的な意味合いを含んでいとみられる。

そこで、これまでほとんど調査が行われてこなかった沖縄における本土式盆踊りの伝承過程を明らかにしながら、沖縄特有の政治的・社会的な背景との影響関係を視野に入れた盆踊りの研究を着想するに至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、沖縄が近現代において国民という枠組みのなかに置かれながら、「他者」の文化をもち、「自文化」と「他文化」をどのように実践してきたのか、芸能研究の側面から解明することにある。この問いに答えるために、「自文化」をエイサーやアンガマ、「他文化」を盆踊りに置き換え、盆踊りが沖縄県民に果たしてきた役割を解明する。具体的には、対象年代を戦前から本土復帰までとし、沖縄県内の盆踊りに関する資料を収集し、データベースを構築する。そのデータを基に、1) 政治的、文化的なコンテキストのどのような変化のもとで盆踊りが導入され、2) 政府・企業・地域共同体がどのように後押しを行い、3) 県民が「自文化」と「他文化」との間でどのように向き合いながら、アイデンティティを(再)構築してきたのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

- 1) 盆踊りの歴史的な変遷をつかみ、実践内容を個別に解明するための基礎史料として地元紙を収集し、記事及び広告欄等に基づいて、データベースを作成する。
- 2) 盆踊りの主催や目的の年代ごとの変化、並びに社会的な要因を解明するために、市町村字史、政府刊行物、公文書等の史料を収集し、社会的背景に関するデータベースを作成する。
- 3) データベース作成と聞き取り等の調査を合わせ、内容の総合的な考察を図る。

### 4. 研究成果

#### 1) 戦前における沖縄の盆の諸相

琉球王朝が崩壊するまで、庶民の様子の多くは明らかにされていない。廃藩置県後の沖縄県では1893年に『琉球新報』(旧)が刊行され、当時の時節ごとの庶民の様子がわかるようになった。新聞記事からは、盆の時期についても、市場での賑わいから娯楽や芸能の様子まで多数の記事を確認することができた。

#### 2) 沖縄の盆時期を支えるエンターテインメントとしての盆踊り

戦前の沖縄では、新聞を通読して管見する限り「盆踊り」はエイサーと同義語で用いられている。エイサーでありながら盆踊り(以下、本土式の盆踊りのみ「盆踊り」と表記)として紹介された記事の初出は、1911年11月6日に名護で行われた天長節の芸能批評の中でみられる。一方で、1913年の天長節ではエイサーとして紹介されていることなどから、用語そのものに区別する意図は薄いものと考えられる。

一方で、エイサーは、琉球王朝の崩壊後に下った土たちが発展させた沖縄芝居へ大きな影響を与えていたことが明らかになった。1912年には、エイサーの主要演目の《仲順流れ》が「ヨイサー踊り(地域ごとにエイサーの発音は異なる)」として舞台芸能の題材として扱われるようになった。1914年には、エイサーの本来の目的の一つである祖霊を弔う念仏を題材にして歌劇『可憐児』が上演され、1916年にもエイサーで歌われる念仏を題材として『盆踊り』が上演されている。どの芝居小屋も盆時期の興行は大成功をおさめ、これを契機にして沖縄芝居の盆興行が定着した。興行形態へ影響するほど、盆の芸能は地域の人びとに根強い人気を博してきたことがわかった。

### 3) 戦前の「盆踊り」の実践

戦前に刊行された新聞等諸資料から明らかになったのは、沖縄本島では「盆踊り」の移入がなかったとみられる点である。本土では1932年に流行歌による盆踊りが広がり、新しい音頭ブームを巻き起こした。しかし、こうした音楽を用いられた様子を見つけることができなかった。

ところが、八重山地方で「盆踊り」を催した記事が『海南時報』の1941年9月の記事から1ヶ所だけ見つかった。同じ沖縄でも八重山地方では、伝統的にエイサーを踊らない。八重山地方ではアンガマと呼ばれる芸能を催す。これが八重山の人びとには、自文化の芸能に当たる。地域の人びとが集落内の家々を巡るといふ点では同様だが、あの世の使いであるウシュマイ(翁)とンミー(媪)がファーマー(子孫)を引き連れて、家の中の仏壇の前で問答や念仏、芸能などを披露するものである。

ここで注目すべきは、流行歌による伝播として移入してきたのではなく、「農村部における健全娯楽への第一歩を踏み出す」ことを大義に掲げられ、戦時における国民としての参与が求められている点である。

八重山地方でのアンガマの実践を記事から遡ると、アンガマが「ふしだら」な芸能として警察の取り締まりを受けている。1931年には「アンガマ踊取締協議会」が開かれ、出演者の氏名、年齢、住所などが警察署へ届け出なければならなくなった。その後も注意事項は加えられ、粗爆野卑にならないよう統制されていたことがわかった。社会的な要請の上に、市街地である登野城が見本・手本となることによって、その目的を達成しようとしている。

実際の演舞は、《瑞穂踊り》(岡崎淑郎作詞 中山晋平作曲)《クイチャ踊り》《新ミナト節》《前之浜》の4つの演目のみで踊った。《瑞穂踊り》は、戦時下の食糧増産を進める青年教育のための踊りとされ、農林省が推奨していた演目である。《クイチャ踊り》は伝統的な八重山の円陣舞踊の一つで、《前之浜》は琉球舞踊に由来する演目である。《新ミナト節》は八重山で活躍していた演奏家の大濱津呂による編曲作品である。

社会的な模範となり、新聞紙上で絶賛されているものの、その他の地域で同様の「盆踊り」が演じられたものは散見されなかった。

### 4) 戦後の「盆踊り」

戦後に刊行された新聞での「盆踊り」記事の初出は、1951年8月10日付の『うるま新報』であった。重要なのは、寺院による主催であった点である。

記事によれば、護国寺(那覇市)では、孟蘭盆会と沖縄戦犠牲者慰霊祭を兼ねて、那覇高校で盆踊り大会を催したほか、臨済宗妙心寺派の万松院(那覇市)では、首里市役所前広場で櫓を立てて催した。盆踊りの演目は不明なままであるが、前者は日本舞踊、後者は琉球舞踊の生徒たちが模範演舞として招聘されている。このような文化的融合は後続にもつながる。

次に盆踊りを主導したのは、琉球文化会館だったことがわかった。琉米文化会館は、米国民政府によって那覇、石川(現:うるま市)名護に設置された琉米親善活動の拠点である。1952年にレクリエーション、エイサーコンクールの名称で「盆踊り」大会が催されている。このコンクールは、これまでのエイサー研究から見過ごされてきたコンクールであることがわかった。ここでは、沖縄から海外へ移民(ハワイ等)した子弟らが帰国して、二世らを中心にハワイで身に付けた「盆踊り」を披露している。本来取り入れたくないはずの日本を含めた日琉米の文化的な接合点として「盆踊り」会場は機能していた。とりわけ琉球文化への回帰を強調してきた米国民政府刊行の『今日の琉球』などにおいても「盆踊り」は取り上げられ、在留米人婦人もまた盆踊り講習会を開催するなどして、楽しんでいたことがわかった。

戦中に中断していた地域文化が復興すると、各地域のエイサーが盛んに行われ、「盆踊り」の存在は薄れたが、エイサーの興隆がかえって弊害を引き起こした。エイサーを担う青年会が組織充実を図るために、多くの家々を巡り寄付を募ったほか、深夜までに及ぶ騒音が地域住民へ悪いイメージをもたらした。地域では、誰もが参加できる「盆踊り」をエイサーの代替とし、「健全化」を測ろうとしていたことがわかった。

### 5) エイサーの櫓と「盆踊り」の関係性

1952年に始まるエイサーコンクールは、第一部が盆踊り大会で第二部がエイサーコンクールだった。琉米文化会館による先鞭もあって、両方の芸能には接合機会が多いことが本研究で明らかになった。この親和性を高めるものとして、現代のエイサーの演舞する会場のほとんどで櫓が欠かせない。実際にその様子を見てみると、櫓は演舞の邪魔に見えるほど機能していない。地域で用いる櫓の形状にもそれぞれ特徴があり、盆踊りとの新しい接合点を考えるために、各地域の盆踊りとエイサーの実践状況を調査する必要があるだろう。

本土復帰までの歴史的な流れについて「盆踊り」をキーワードに確認することで、沖縄芝居やエイサーの新しい歴史的な側面を明らかにすることができた。今後、現在の実践状況を調査することで、本土大衆文化の影響に関する研究を広げていく可能性を確信することができた。



櫓の周りで演舞する  
八重瀬町安里青年会  
(2019年8月)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 遠藤美奈	4. 巻 31
2. 論文標題 戦前の沖縄における「エイサー」と「盆踊り」の諸相	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沖縄芸術の科学	6. 最初と最後の頁 59 - 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 戦前の沖縄における本土式盆踊りの諸相 — 沖縄本島および八重山諸島について —
3. 学会等名 東洋音楽学会 第70回沖縄支部例会（沖縄県立芸術大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 沖縄における「盆踊り」の移入と定着、その後の影響について
3. 学会等名 東洋音楽学会 第69回全国大会（大正大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 戦前の沖縄における「エイサー」と「盆踊り」から戦後の「盆踊り」の導入時期まで
3. 学会等名 沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員発表会（沖縄県立芸術大学附属研究所）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 沖縄の盆行事にみられる「自文化」と「他文化」 エイサーとアンガマと本土式盆踊り
3. 学会等名 第12回中日音楽比較学術シンポジウム（中国：上海音楽学院）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤美奈
2. 発表標題 アメリカ統治下の沖縄における本土式盆踊りの実践をめぐって「琉米文化会館」「将校クラブ」「沖縄全島エイサーコンクール」を中心に
3. 学会等名 日本音楽学会 第70回全国大会（大阪大学）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 趙維平編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 上海音楽学院出版社	5. 総ページ数 452
3. 書名 第十二届中日音楽比較学術研究会論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考